

ノルウェーの劇作家ヘンリック・イブセンはこう言いました。

『社会は一つの船のようなものだ。だれもが舵をとる準備をせねばならない』と。

そう！地域社会の課題を解決するのも地域を向上させるのにも、

行政だけが動いてもダメなんです！

豊かなスキルや経験を多く持つ大人が活動するだけでもダメなんです！

活力あふれる中高生が考えるだけでもダメなんです！

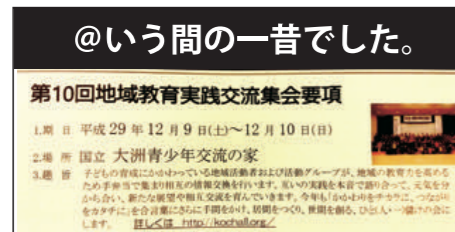
それを実際に行動に起こし！実践し！地域住民を巻き込んで、

またそれとともに実現を目指さないと意味がないんです！

地域を変えるためには地域が動かなければならない、

一人一人が舵を取って船を動かす、まさにそういうことなんです。

12月9日 地域教育実践交流集会（文部科学省委託事業）における発表
市ケ尾ユースプロジェクト高校生のむすびの言葉



【地域教育実践交流集会とは】

愛媛県を中心に子どもの育成にかかわっている地域活動者および活動グループが、地域の教育力を高めるため手弁当で集まり相互の情報交換を行います。平成28年度第9回、平成29年度第10回では文部科学省委託事業として展開しました。

詳しくは <http://kochall.org/>

～市ケ尾ユースプロジェクトサポーター・地域教育実践交流集会実行委員として～ 武智理恵

二人の市ケ尾高校生は愛媛県大洲に集まった全国の人たちに市ケ尾ユースプロジェクトの存在・活動内容を見事に伝えました。彼ら自身にとり岐路となる貴重な体験になったとも思います。市ケ尾高校生2人の分散会での発表には多くの反応と関心が集まりました。

出会いの広場では愛媛県の高中生や他県の大学生との交流もあり、若者の生き生きとした姿にこれからの地域発展に大いなる期待を抱かせました。10日のトークセッションでの突然の指名による発言は参加者250名に大きな感銘と気づきを与えました。彼ら二人は市ケ尾高校を、そして市ケ尾ユースプロジェクトに関わる全ての人の思いを見事に伝え、実践したといえます。



1. 件名 第10回地域教育実践交流集会
2. 日時 平成29年12月9日(土)～12月10日(日)
3. 会場 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家
4. 出席者 生徒 出田遼聖 佐々木亜怜 引率教諭 近藤駿矢
5. 概要

この交流集会は、子どもの育成に関わっている地域活動者および活動グループが、地域の教育力を高めるため相互の情報交換を行い、新たな展望や相互交流を育むものである。現在取り組んでいる「市ケ尾ユースプロジェクト」について、第1日目の分散会において、これまでの取り組みと成果を発表した。

6. 内容
 - 12月9日(土)
 - ①歓迎アトラクション 12時
 - ②オリエンテーション、歓迎ワークショップ 13時
 - ③分散会(15分散会45事例) 14時10分
「市ケ尾ユースプロジェクト」発表 第4分散会 会場責任者:森脇和夫
 - ④出会いの広場 18時
 - ⑤交流会 19時

歓迎アトラクションでは、北海道から長崎まで、日本のありとあらゆる場所から自分たちの思いを伝えにやってきた発表者たちに、地元、愛媛の野村中学校・高等学校の生徒による箏の演奏、松山聖稜高等学校の生徒による太鼓の演奏が用意されていた。どちらも、学校と地域とが連携して行う、いわゆる「地元の文化を保存していこう」という思いの伝わる、これから地域教育の事例を発表していく発表者たちへの最高の「おもてなし」であった。

オリエンテーションは、全国各地の様々な地域から集まった参加者があつという間に繋がり合った。本校生徒2名も、最初は緊張している様子であったが、みるみる打ち解け、お互いの活動内容や地元の話で盛り上がっていた。

分散会は、3団体がそれぞれ15分の発表、全体で45分の質疑応答を行った。我々の会場は、司会者、責任者、発表者合わせて20名の参加で、市ケ尾高校の発表は、3団体のうち最初に行われた。昨夜ホテルでリハーサルを繰り返した2人の顔はとても落ち着いており、やる気に満ちあふれていた。質疑応答では、沢山の発表者、参加者からの質問を受け、賞賛をいただいた。その後に発表したのは「鐘踊り保存会」という団体で、愛媛県四国中央市の一部の伝統芸能となっている鐘踊りという踊りを後世に伝えていこうという思いを伝えた。最後に発表したのは「第15回民家の甲子園」の実行委員会で、日本各地、高校生が残したいふるさとの町並みや景色、文化などを受け継いでいこうというものであった。年々規模を拡大しており、今年で15回目を迎えたとのことである。

「出会いの広場」では、名刺交換会が行われた。生徒たちは、会場で顔を合わせた方をはじめとして、他県の高中生や大学生、NPO法人の方々など、様々な方との交流を深めた。

夕食をとりながらの交流会も行われ、ビンゴゲームなどのレクリエーションを行い、更に交流が深まった。



- 12月10日(日)
 - ①めざましトーク 9時
 - ②トークセッション「地域教育の明日を探る」 10時40分
 - ③閉会式 12時20分

「めざましトーク」は、聞き手と語り部の4名の方が登壇し、今後の地域教育について語った。トークセッションは「地域教育の明日を探る」と題して、5名の方が壇上でフロアの参加者の意見も交えながら、地域教育のあるべき姿や将来への展望について熱く語り合った。壇上の司会者の方から、本校生徒2人に対し「一言感想を。」と、突然投げかけられる場面もあったが、2人とも自分の思い、願い、そして将来への展望を多くの参加者に伝えた。

所感

「地域教育」というものは学校だけでは伝えられないことを伝えられる非常に多くの可能性を秘めた教育であることに気付かされた。全く違う土地、気候、話し方、そしてその環境で続けられている文化や行事。その多種多様な人が集まり、話し、関係が深まっていく。その繋がりが、また新たな繋がりを生み、その繋がりが形になり、力に変わっていく。それが子どもを、大人を変えていくのである。もちろん、机上で勉強に励むのは良いことであり、我々教員はそれを教えていかなければならない。しかし、いざ社会に出たときに必要になるのは、人と話す力であったり、実際に行動を起こす力である。実際に今回参加した2人の様子は行く前と行った後では随分変わっており、ユースプロジェクトでの活動も順調である。この交流会の合言葉は「かわりをチカラに、つながりをカタチに」というものであり、何年も交流会を重ねていく中で、毎年たくさんのことに気付かされると聞いた。もしかしたら今回はたまたま機会を頂いた話かもしれない。しかし、私はそれを「たまたま」で終わらせてはいけないと思っている。今回2人が感じた、他には決して変えることのできない、かけがえのない「経験」を今後の市ケ尾高校に繋げていくためにも、この活動を絶やすことなく、生徒の力で続けていけるようにサポートしていきたい。

神奈川県立市ケ尾高等学校 教諭 近藤駿也